



Title	『咸陽宮』絵巻伝本における物語化の方法：その記述と素材
Author(s)	近本, 謙介
Citation	語文. 1993, 60, p. 24-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68855
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

『咸陽宮』 絵巻伝本における物語化の方法

—その記述と素材—

近 本 謙 介

一

康治二年（一一四三）九月二十九日、博学の誉れ高き藤原頼長は、その日記『台記』に、自らの読書学問の軌跡を書き付けている。うち保延三年（一一三七）分には、「史記五十一巻」および「燕丹子三巻」の書名が見えており、後者の書名は「日本国見在書目録」にも記されていて、夙に伝来していたことが知られるが、この燕国の太子丹と秦始皇帝をめぐる物語が文学の世界に姿を現すには、『平家物語』の成立を待たねばならなかった。この『平家物語』の綴る咸陽宮譚が和漢朗詠集注の世界と密接に関わる事を明らかにされたのは黒田彰氏であったが、『源平盛衰記』をはじめ、中世の多くの文芸が影響を享けたと覺しき『和漢朗詠集』永濟注中の雜・白「秦皇驚歎燕丹之去日烏頭 漢帝傷嗟蘇武之來時鶴髮」賦に付された注（五八三）は、烏頭馬角の奇瑞譚を記し、末尾には「史記、并、燕太子伝ニミヘタリ」との出典注記が見えている。その成立が「平安末期から鎌倉中期の間、おそらく鎌倉前期頃」あるいは院政期にも比

定される永濟注であつてみれば、史書として学んだであろう頼長から、独自の要素を内包し、中世におけるある種正統的な理解にまで広まる永濟注の説の醸成までに、さほど時間を要さなかった実態が浮かび上がってくる。和漢朗詠集注の存在の大きさを認識させられる所以である。

二

『和漢朗詠集』永濟注においては、前掲雜・白注をはじめ、古宮付故宅「強吳滅兮」注（三七三）、錢別「前途程遠」注（四五三）、述懷「專諸荆卿」注（五四七）などに、一連の咸陽宮譚が各場面に切り取られる形で引かれているが、同様に、燕丹・始皇帝話の枠組から離れた全くの語句レベルからでも、その一部が想起される様は、すでに『芸文類聚』にも見えており、巻九・水部下「橋」の項には、燕太子曰、燕太子丹質於秦、秦王遇之無禮、乃求婦、秦王爲機發之橋、欲以陷丹、丹、丹過之無虞。

のように記され、また卷四十三・樂部三「歌」の項には、

又燕荆軻蕭蕭歌曰、燕太子丹使荆軻刺秦王。

とある。「橋」や「歌」といった語句から個々の要素が様々に呼び出される在り方は、朗詠注に止まらず、中世文芸においても一般的なものであつたようで、「太平記」巻十「赤橋盛時自害之事」には、次のように田広先生の話が引かれている。

この陣ニシテ腹ヲきらんと思フ也。(中略)かの田廣先生ハ、燕丹ニ語らはれたる時、此事もらし給ふなといはれて、其疑ヲ散ぜん為ニ自害ヲシテ、燕丹か前にふしたりしぞかし。

また、「塵荆鈔」巻十「楽器等之事」にも、

問、楽器管絃等事

答曰、琴者西域之樂器也。震旦ニテハ伏羲造始。(中略)華陽夫人彈^{シカバ}琴、秦ノ始皇難ヲ逃^{ノガ}レ、荆軻秦舞陽打レシカバ、燕ノ太子丹モ終ニ亡ビ、田光先生ガ自殺、樊餘期ガ首ヲ借シ、謀モ徒ニ成ヌ。

と見えており、こうした個々の要素が、軍記や百科事典的な教養書の中で機能している中で、まとまった咸陽宮譚として物語化される方法を、各々の「咸陽宮」絵巻伝本の物語構成から探る必要があると思われる。

後世に咸陽宮譚をまとめた物語として綴ろうとした場合、まずは「平家物語」の語るそれに範をとらねばならなかったことは想像に難くなく、事実「咸陽宮」伝本のうち大阪青山短期大学本は、殊に「源平盛衰記」との緊密な関係が窺えるのである。

「平家物語」諸本が咸陽宮譚を引くのは、延慶本が、

我朝ニモ不限^ヅ、恩ヲ不知^ル者ノ減ビタル例ヲ尋ルニ、

(咸陽宮譚)

サレバ頼朝旧舊恩ヲ忘レテ、宿望ヲ達セム事、神明ユルシ給ハジト、旧例ヲ考ヘテ、驚ク事無リケリ。

とするのに代表されるごとく、恩を忘れた者の減びた例という枠組に於いて語られるものであり、「平家物語」を用いたと思われる謡曲「咸陽宮」は、「そもく此咸陽宮と申は、都のまはり一萬八千三百餘里」という咸陽宮の威容から語り始め、

唯これ後の琴の秘曲、ありがたかりける例かな。

と、一曲を、始皇帝を救った華陽夫人の琴の樂の徳に収斂させる形でまとめている。

現在までに知られる「咸陽宮」絵巻の伝本については、伊井春樹氏が次のように整理しておられる。

- | | | |
|----|---------------|--------|
| 一、 | 1 穗久邇文庫藏 | 二卷 |
| | 2 専修寺藏 | 二卷 |
| | 3 大阪青山短期大学藏 | 二卷 |
| 二、 | 4 二松学舎大学藏 | 二卷 |
| | 5 スペンサーコレクション | 二卷 |
| | 6 信多純一氏藏 | 一卷(上巻) |

このような多様な伝本が残る「咸陽宮」絵巻であるが、それぞれ物語としての枠組は、自ずから「平家物語」や謡曲のそれとは異なつてこよう。そこには、ひとつの物語たらしめるための意図なり方法なりが介在してくると思われるのである。

三

恩を忘れた者の減びた例として咸陽宮譚を引く「平家物語」諸本

には、巧みに孝行譚・報恩譚の要素が織りこまれてゐる。始皇帝によつて禁獄の誅めを受ける燕丹は、両親への孝行を口実に本国への帰還を嘆願するが、咸陽宮譚の冒頭にあたるとこの場面を、『源平盛衰記』巻十七の本文によつてあげると、次のようになる。

燕丹ハ軍ニ負テ、始皇帝ニ捕ハレテ、深く誠ヲカレ、六箇年ヲ経ニケリ。燕丹ハ、我身ノ事ハイカ、セン。故郷ニ老タル親ノアリケルヲ、今一度イカ、シテ見奉ラントソ悲ケル。丹、始皇ニ歎申ケルハ、今ハ本国ニ免シ遣シ給ヘ。六箇年ヲ過テ禁獄例ナシ。又、本国ニ老タル父母アリ。イカハカリカハ歎^シ悲^シ給ラン。今一度見ヘ奉ラハヤト云ケレハ、

該当する大阪青山短期大学蔵本（以下、青短本）の本文は、次のごとくである。

この人は、かうくゝの心さしふかく侍りけるか、わか身、かくとらはれとなつて、るいせつにくるしむことをは、露ちりほともなけかす、た、いかにもして、故郷の父母を命のうちに今一目見奉らまほしく、なけくおりふし、しくはうていのせんしのむねをもれき、て、なくくゝなけき申やう、ねかはくは大王、我をゆるして、本国にかへし給へ。老たるち、は、のまします、いかはかりなけき給ふらん。いま一めまみえ奉るへし。さる事ならは、その御よろこひには、はんえきかかうへをはね、えんのくにのさしつとともにさ、け奉るへし。それつみある人はいましむる事、六ヶ年をすこす法なし。

傍線を施した箇所が対応する部分であるが、青短本と『源平盛衰記』とが無視すべからざる緊密な関係にあることは、これに続く烏頭馬角の奇瑞を綴る箇所からも窺えることが、すでに指摘されてい

る。

そうした中で、青短本の波線部は、燕丹が帰国許可の見返りを自ら持ち出す場面であるが、これは『源平盛衰記』をはじめ、延慶本、覚一本など『平家物語』諸本にみえず、また『咸陽宮』諸本にも確認されない独自要素である。

この後本国への帰途には、昔の燕丹の父による放生の恩に対する報恩のために現われた亀に救われ、本国に着くと、「母は、かくは、はくうのきすいにて、わかれて久しき太子をふた、ひあひみる事のうれしさよ。ちくるいすら、その心有。人間これをほうせざらんやとて、あらふるからすともをやしなはれければ、かしろの白きからす、をのつからとひきたりけるこそふしきなれ」と、餌食を施す事によつて烏に報いる場面が語られており、このあたりは、巧みに報恩という糸によつて物語が展開していくことになる。亀に救われる場面の後、延慶本には何も記述はなく、覚一本は「これも孝行のこゝろざしを冥顕あはれみ給ふによてなり」と、孝行譚として位置付けている。烏に餌食を施す場面の後に、延慶本は「是ハ父母ノ子ヲ思フ志ノ深ク切ナルガ故也」と親心に帰結させ、覚一本はそもそもこの場面を欠いている。そうすると、亀の報恩について「父力放生ノ恩ヲ忘ス、子ノ燕丹ニ報^レケリ」として、さらに「白鳥ニ報^ン」と母の報恩を綴り、物語を一貫して報恩譚に引き付けている『源平盛衰記』と、青短本および『咸陽宮』絵巻第一系統諸本は、やはり余程近い関係にあるといわねばならない。

先の青短本のみ独自の要素は、次の場面に引き継がれ、物語から浮き上がらないように処理されている。

えんたん、心におほしけるは、人のなさけある時は、吾もな

んそそのとくをほうせざらん。しかれば、すみやかにはんえき
かかうへをきり、えんのくにのさしつ、けんけいもろともに、
始皇帝へ奉るへしと、しんか大ふをめして仰合られるに、

傍線部からも、あくまでも報恩譚としてまとめようとする意図が見
てとれよう。

ところが、この燕丹の報恩の志も、荆軻の「太子、このたひの
れかたきしんこくをいて、ほんこくに返り給ふこと、まつたくし
くはうていにあらず、た、かうくほうをんの御こ、ろさしふかく
ましますゆへに、天神ちきのみやうしよにあつかり給ふものなり」
という謀反を唆す進言によって、「せひにまとひ、ほうをんの心を
わすれて、しんこくをうつへきけいりやくを、ことし給ふ」こと
となるのである。「源平盛衰記」が、「燕丹ハ、ノカレ難キ罪科ヲノ
カレ、本国ニ被還^{ヘサ}テ、再ヒ父母ヲ見ケレハ、深ク始皇ノ恩ヲ報
セントコソ思ヘキニ、其情ヲ忘テ、秦ノ國ヲ亡サント巧ム心切ニ
シテ」とするように、この忘恩の要素こそは、『平家物語』におい
て引事として欠くべからざるものであつた。青短本はそれを継承し、
物語として、更に燕丹の忘恩の要素を際立たせ、一貫させようとし
ているのである。

討秦の計略を巡らす燕丹に、荆軻は樊於期の首を持参して謀つて
始皇帝を討つことを進言するが、それに対する燕丹の反応は、青短
本では次のように記される。

太子このよしきこしめし、きうてうふところにいる時はかり、
人さまころさすといへり。いはんや、吾くにをたのんてかくれ
すめるはんえきを、なさけなくきつて出さんこと、道にあらず
との給へは、

燕丹は、樊於期の首を差し出す事を拒絶するわけだが、この要素は
すでに『史記』に見られるものである。

太子曰、樊將軍窮困來帰丹。丹不忍以己之私傷長者之意志。

(卷八十六・刺客列伝)

延慶本も「樊於期、秦王ノ難ニ逢テ、身ヲ吾ニ任タリ。無頼追捨
事、無情。サラヌ事ヲハカラヘ」と該当する記述を有しており、
『咸陽宮』の第一系統本においても、専修寺本に「我をたのみてま
いりたるものを、あへなくちうせん事みれんなるへし。いか、すへ
し」と見えている。

咸陽宮譚を綴る上でいたって自然なこの要素が、青短本において
は、以前に燕丹が本国への帰還の見返りに、樊於期の首を献上する
事を自ら提示し、実際本国でそれを実行しようとする場面を設定し
たが為に、物語の展開上破綻を来す結果となつているのである。こ
のあたり、青短本は報恩譚を巧く用いながら、その中で燕丹が亡ぶ
必然性としての忘恩の要素を際立たせた物語化を図りながら、下敷
きとした資料の処理を誤つたといえよう。

青短本を例にとつて、本文から窺われる咸陽宮譚を一つの物語と
する際の在り方を見てきたが、このような物語中の一要素から、秦
始皇帝史を不老不死の薬を求めた祝言性をもつて物語の枠組とする
意識に至るまで、物語を創る上での意図は浸透しているのであろう。
多様な『咸陽宮』諸本は、原態論もさることながら、それぞれを独
立した一本の物語として、その物語化の方法を探ることを要求して
いるように思われる。

荆軻と秦舞陽は始皇帝のもとに趣き、首尾よく始皇帝暗殺の任を遂げかけるが、始皇帝の嘆願により、華陽夫人の琴の楽を聴く暇を与えた事が命取りとなる。華陽夫人の琴の音の素晴らしさの描写を、専修寺本によってあげると、次のようになる。

てんかにならひなきことのしやうすなれば、とふ鳥も地におち、水魚もおとりいつるほどのつま手を出し給ふに、ましてやいまはの玉のをこと、さこそはひ、きよくもつくさるらめと、しよ人み、をそそはたてける。

傍線部の喩えは、青短本「此后のつまをとには、そらをかけるつはさもちにおち、おそろしきけた物もやさしくなるほどの上手にておはしけるに」や、穂久邇本「此きさきのことの音には、とふ鳥も地におちけるそかし」のように、第一系統本には類似の表現がみられる。これは華陽夫人の琴の要素を持つはずのない『史記』には、当然見出せないが、延慶本「此后ノヒキ給ヘル琴ノ音ニハ、空飛鳥モ地ニ墮チ、武キ武士モ怒レル心平ギケリ」をはじめ『源平盛衰記』にも「空ヲ飛^フ鳥モ落^ズ、地ヲ走ル獸^ヲモ留^ル程ニ爪^ヲ音^ヲヤサシキ上手ニテ御坐シケル」とみえており、『平家物語』を素材としたと思われる謡曲『咸陽宮』も、次のように、この喩えを受け継いでいる。

本より妙なる琴の音に、飛ぶ鳥も地に落ち、武士もやはらく程の秘曲なれば、ましてや今は玉のを琴、さこそは御手も盡されけめ。

ここで注目すべきは、傍線部にも専修寺本との類似が見出せる点であろう。ここに引用した専修寺本および謡曲『咸陽宮』の続く本文をさらに引いてみる。

・専修寺本

ひきよくさま／＼おほき中に、くはんふらくといふきよくをひき給ふこそやさしけれ。是は、たけきもの、ふの心をやはらけんとおほしめさる、ゆへなるへし。花の春のきんきよきは、くはふうらくにりうくわえん、りうくはえんのうくひすは、おなしきよくのさえつり、月のまへのしらへは、よさむをつくる秋かせ、雲ゐにわたれるかりかね、ことちにおつるこゑ／＼もなみたの露の玉つさ、玉さかに人はよもしらいとのしらめをあらためて、君さけや／＼、七せきのへいふうは、おとらはこえつへし、らくのたもとをも、ひかはなとかきれざらん。ほうしんはうんにえへり、くんしんはせいしんの御たすけと、をしかへし／＼、二、三へんひき給ふを、しくはうていはきこしめされしかとも、けいか、しんふやうは、いかてかこれをき、わくへき。た、きさきのきんの音にき、とれて、たけき心をもうしなひて、くはん／＼としてねふれるかことくなり。

・謡曲『咸陽宮』

花の春の琴曲は、花風楽に柳花苑、柳花苑の鶯は、おなじ曲の囀、月の前の調は、夜寒を告ぐる秋風、雲居に渡れる雁、琴柱におつる聲々も涙の露の玉章、たまさかに／＼に、人はよもしら糸の、調を改めて、君さけや君さけや、七尺の屏風は、躍らば越えつべし、羅縠の袂をも引かばなどか切れざらん、謀臣は有無に酔へり、群臣は聖人の御たすけと、押し返し／＼二、

三返の琴の音を君は聞し召さるれども、荆軻は聞き知らで、たゞ緩々と侵されて、眠れるが如くなり。

専修寺本には、謡曲『咸陽宮』との同文関係が存するのである。もつとも、ここに引く部分は、穂久邇本もほぼ同文となっているので、ことは専修寺本のみの問題に止まらない。この後始皇帝が意を決して逃れる部分を謡曲は、

御衣の袖を引つ切つて、屏風を躍りこえ、電光の撒するよそほひ、霰の白玉盤に落ちて、欄干をはしる心地して、銅の御柱にたちかくれさせ給ひしかば、

としており、専修寺本は、

御衣の袖を引きりつ、七せきのへいふうをゆらりととひこえ、てんくはうのけきするよそほひ、あられのしら玉万里おちて、らんかんをはしるこ、ちして、あか、ねの御はしらにたちかくれさせ給ひけり。

と、謡曲の地謡にあたる本文をほぼ忠実に引くが、穂久邇本の記述は、

御衣のたもとをふりきつて、七しやくのへいふうをとひこえ、てんくはうのけきするよそほひして、あか、ねのはしらのかけにかくれ給ふ。

のように簡略化されており、謡曲を取り込んだ形を、専修寺本の方がより正確に残しているといえる。

専修寺本には、他にも謡曲を用いたと覚しき箇所がある。謡曲では、荆軻、秦舞陽の咸陽宮への道行に次の一節がある。

山遠うしては雲行客の跡をうづみ、松高うしては風旅人の夢を破る。

『平家物語』諸本には、この場面に、道行にあたるものは記されていないが、専修寺本には道行文と称して差し支えない本文が綴られている。

はるく／＼のたひのそら、山とをふしては雲かうかくのあとをうづみ、松さむふしては風りよしんのゆめをやふりつ、あかしくらしてゆくほとに、野くれ山くれさとくれて、名にのみき、ししんのくに、かんやう宮にそつきにける。

傍線部に対応をみることができ、専修寺本はここでも謡曲を素材として用いつつ、道行を綴ったと考えられる。むしろ謡曲を用いたことが、この部分に道行を綴らせる契機となったと言う方が正しい順序であるだろう。

第一系統本においても、青短本は『平家物語』と同じく道行はなく、穂久邇本は

こまをはやめてゆくほとに、野くれ山くれ里くれて、いくよな／＼の草むしろ、しししのひつ、ゆくほとに、をとに聞しよりもなをおひた、しき、かんやうさうにそつきにける。

のように、傍線部を欠いている。専修寺本の傍線部以降、謡曲『咸陽宮』にはなくて穂久邇本と共通する表現も、

山又山を越えゆけば、そこしもなき旅衣、野暮れ山暮れ里くれて、名にのみ聞きし邯鄲の、さともはやく着きにけりく。

のように、謡曲『邯鄲』における道行などにみえており、専修寺本の指向したところは自ずと知られよう。

専修寺本と謡曲『咸陽宮』との関係は否定できないが、始皇帝に荆軻が投じた剣に葉の袋を投げた医師を、謡曲が「番の醫師」とし

か記さないのに対して、専修寺本をはじめ第一系統本の穂久邇本、青短本が共に「かふたん」と、『史記』「夏無且」、「源平盛衰記」「夏附且」などを享けてその名を具体的に記していること、あるいは咸陽宮の威容を記す数的な記述において謡曲との間に異同が認められることなどからも、専修寺本はすでに第一系統本としての一通りの物語が成り立った後に、部分的に謡曲「咸陽宮」を用いることで記述の差し換えあるいは増補を行いつつ、物語の再構成を図つたものと考えられる。穂久邇本には、専修寺本の引く謡曲の記述が簡略化された部分が見られることから、こと謡曲との関係に限ると、専修寺本よりも後出の本文ということができよう。

『平家物語』を素材として作られた謡曲「咸陽宮」を、一方で同じく『平家物語』の咸陽宮譚に範をとつた『咸陽宮』絵巻が取り込んで本文を成すといった、物語作成の過程が浮かび上がってきたが、そうした素材の引用の絡み合いの中で、『咸陽宮』絵巻の伝本は多様な姿を残すことになったのである。文芸におけるまとまつた咸陽宮譚叙述の出発点となつた『平家物語』のそれが、後世の文芸に与えた影響はかくも多大であつたといわねばなるまい。

五

第一系統本の青短本冒頭は、

むかし、しんたむこくにかんやうきうと申て、いかめしきた
いり立られし事ありけり。その時のみかとを^は、しんのしくは
うていとそ申ける。此みかとのせんそをとふらへは、

として、秦始皇帝前史を語り、その末尾は徐福が不老不死の薬を求

めて大海に漕ぎ出し、

抑ほうらいきうと申は、むかしより名をのみ聞て、見たる人はなしといへとも、皇帝の徳により、せんになのしゆつをもつて、せんやくを、もともめ侍るへしと、上下万人をしなへて、たのもしくそおほえける。

のように、祝言性をもつて結ばれる。青短本の語る咸陽宮譚は、このように始皇帝への寿ぎの体裁をとっているが、こうした一本の物語としての枠組を他の第一系統の伝本に求めると、どうなるであらうか。

専修寺本は、咸陽宮の成り立ち、位置などに言及しつつ、

そもく上古のいにしへは、世すなほに、たみあつかりしうへ、せいしんよに出て君となり、しんとなり、いつくしみをふかくし、めくみをひろくして、世をまもり、たみをあいし給ひしかは、をのつかたてんかこくか、とこしなへにやすかりき。

しかるに、しうの代すてにかたふかんとせしころより、やくふんたうおとろへ、しよこうをのくゝゝをもつはらとして、たかひにさいしうの心をふくんで、くにをあらそひ、世をはかりしかは、ていわうの御まつりことたえはてたり。

の如く、発想と表現は一般的なものの範囲を越えないと思われるものの、秦国史に止まらず、いわば下降史観の体裁を以て物語を語り始める点は、青短本との異同として注目しておく必要があるだろう。その末尾に目を転じると、青短本と同じく徐福が大海に漕ぎ出す叙述までは共通するが、

えんすいはうくとして、もとむるに所なし。風かうくとしてまなこをうかちぬれば、ほうらいをみすはあへてかへらし

といひしとうなんくはんちよも、いたつらに舟のうちにておいぬらんとそきこえける。

のように、霸王として現世最高の権力を手にした始皇帝も、ついに不老不死の望みを叶えられることはなく、明らかに青短本の祝言性とは相容れない結尾となっている。これは、専修寺本自らの冒頭との対応関係に於いて、必然の結果として綴られるべき終焉であつたはずで、史観を持ち込んで物語を構成しようとした専修寺本という一本の伝本の論理、梓組の表れであろう。

さて、第一系統本においても専修寺本との関係が密接な穂久邇本は、どのような梓組の下に物語を構成しているであろうか。

むかしは、人の心すなほにして、上あきらかにして下にくらさりしかは、をのつから天下としなへにして、たみに下までもゆたかにありしかとも、中ころとなりては、しやかうをもつはらとするゆへに、君かたましく、臣いつはりて、しんきにそむき、れいせつをみたりけるほとに、國やうやくみたれそめて、たみをのつからこゝろ／＼になりにけり。

この冒頭は専修寺本と同趣ということができよう。しかし、穂久邇本の末尾は、「つるにえんのいくさうちまかせしかは、太子丹は、えんすいのほとりにして、しさつせられけり。あはれなりし事ともなり」と、燕国の滅亡を語ったのち、徐福譚とは全く異種の記述によって物語を締め括っている。

さてしくはうてい、かのはしらに立しつるきをぬかせてみ給へは、さいしやうのつるきに、りうせんとめいをしるしたり。これすなはち楚王、はくやにおほせてうたせ給ひしゆふけん、みけんしやくか口にふくんで、そわうのくひにふきかけ、父の

あたをほうせしつるきなり。このつるき、えんのくに、と、まつて、太子丹のたからとなれり。しかるに太子たん、うんめいきはまるゆへに、つるきをとられ、あまつさへいのちをほろほして、くにをもうは、れたまひけり。しくはうていは、このつるきをえたまひてのち、いよ／＼天下おさまりなひきしかは、子孫万里につたへて、てうほうとすへしと、よろこひ給ふ事かさりなかりけり。

燕国に伝わったという眉間尺の剣については、青短本にも語られているが、それは物語末尾ではなく、燕丹が荊軻にその剣を与える場面においてである。

仙必のけんとして、一尺八寸候しつるきを、はこのそこにかくしこめたり。此つるきと申は、むかし楚王后、くろかねの丸かしをうみ出し、かんしやうはくやに仰せて、二つのけんにうたせられしゆうけん、みけんしやくかきつさき三寸くひきつて、父のあたをほうせしつるきなるを、燕の国につたへて、代々のてうほうとす。されは吉例なればとて、このけんをけいかにあたへ給ふ。

『平家物語』諸本にはみられない眉間尺の剣の要素が『咸陽宮』絵巻の物語に取り込まれる点、いかなる経路を想定すればよいであろうか。ここで注目すべきは『太平記』、『三国伝記』、『曾我物語』等に語られる眉間尺譚であり、これらのうち『太平記』巻十三に語られるそれと『咸陽宮』絵巻との関係は、黒田彰氏に詳細な報告がある「太平記に結実する眉間尺譚」の「中世における流伝の様」¹⁶を考える上で、無視できないものである。

ここに語られる雌雄両剣が尋常ならざる名剣であったことは、

「誠ニ精靈有ト見ヘケレハ」や、眉間尺を討とうと違わされた楚王の兵が「眉間尺一人か勇力ニ被推其雌劍ノ刃ニフレテ死傷スル者幾千万ト云」数ヲシラス」の描写からも窺われるが、この「太平記」は眉間尺譚を語り終えた後に、次のように記している。

含^ミたる劍ノサキ留^ツ燕^ニ州^ニ、成^リ太子丹^ノ劍^ヲ、令^シ議^セ荆軻^ヲ秦^ニ巫陽^ノ討^ツ秦^ノ始皇^ヲ、自^ラ差^シ圖^ヲ匣^ノ中^ニより飛^ビ出^テ、追^ヒ奉^リ始皇^ヲ帝^ヲ、葉^ノ袋^ヲヲかけられなから、口六尺ノ銅ノ柱ヲ半^ニキレければ、遂^ニ二三^ニ折^レて失たりし、其首ノ劍は也。

ここに梗概のみではあるが、眉間尺の劍と燕丹の劍を結び付ける所伝の存在が確認され、先の黒田氏の論考において「但し、雌劍の先が太子丹の劍となる点、それが指図の匣から「飛出テ」（玄玖本「執出^{シテ}」とも）始皇を追う点については所見がなく、或いは作者の趣向か」とあることを考え合わせるならば、穂久邇本および青短本に語られる眉間尺譚は、「太平記」の所伝を孤立化させないという一事においてもすでに貴重といわねばならず、また作者の趣向で片付けられないことを示唆する点に於いても興味深い内容を含んでいると思われる。

「咸陽宮」と「太平記」の眉間尺譚には、雌劍と雄劍の違い、「太平記」にのみみられる「三^ツ折^レて失^セ」せたとする所伝など異同も多く、「咸陽宮」が「太平記」を直接引いたという関係としては説明できないようである。実際、「咸陽宮」のように雄劍を止めたとする所伝も「祖庭事苑」、真福寺本「新樂府略意」、「和漢朗詠集」私注を始め、多く知られるのである。

このように直接関係は想定できないながらも、「咸陽宮」絵巻が眉間尺譚を綴ろうとするとき、その底流には「太平記」の世界との

繋脈があると思われるのである。「太平記」においては、父干将の仇を報ぜんとする眉間尺の許へ父の古い知音が訪れて、ひとつの策を持ちかける。

与^レ汝^ヲ可^シ議^ス奉^リ討^ツ楚王^ヲ報^シ父^ノ讐^ヲ。所^ノ持^シ劍^ヲ前^ニ三寸食^ヒ切^テ、含^ミ口^ノ中^ニ可^シ死^ス。我^ハ汝^ガ頸^ヲ取^リて獻^ス楚王^ニ。楚王悦^ニテ必^ズ汝^ガ首^ヲ見^セ給^ハバ其時口^ノ含^ミたる劍ノサキヲ吹^キ懸^ケ楚王^ニ共^ニ可^シ死^ス。

これを聞いた眉間尺は「大^ニ悦^ビテ」、劍の先を口に含み、自己^ノ頸^ヲかき切^リ、客ノ前^ニに聞^キたりける。

と、この計略を実行に移すのである。これと、「咸陽宮」において、荆軻による計略を持ちかけられ、係累を始皇帝に殺された仇を報ずるために自ら首を掻き切つて与える樊於期との間には、並々ならぬ話柄の類似関係を看取えよう。「太平記」においては、大塔宮護良親王の首が劍の先を口に含んでいたため、足利直義に検分させなかったことから眉間尺譚が引き合いに出されており、恨みを含んだ首の話という連関は、樊於期自らが劍を口中に含んだのではないものの、「咸陽宮」においても当然意識されていたものと思われる。

しかし、「咸陽宮」絵巻穂久邇本および青短本に語られる眉間尺譚の問題は、話柄の連関に止まらず、いま少し深い水脈と繋がっているのではないだろうか。さきに引いた「太平記」の、眉間尺の劍と燕丹の劍を同一とする部分には、次の記述が続く。

只^ニ雌雄^ノ二^ノ劍^ハ被^ハ称^セ干将^ノバクヤ^ト、代々ノ天子^ノ寶^ヲたりしが、至^テ陳^ノ代^ニ俄^ニ失^セたり。

「太平記」では続いて、この「代々ノ天子ノ寶」であった劍が、「或^ハ時天^ニ一^ノ惡星出^テ、示^シ天下^ニ妖^ヲ」した際に、光を放つてそ

れと戦ったこと、さらに天子に奉ろうとした時、雌雄二つの龍となつて沢に沈み、その天子の手に入ることはなかったことを語っている。眉間尺の剣とは、そのような剣であつた。

穂久邇本および青短本に語られる眉間尺譚を、いま一度検証してみたい。まず、青短本のそれは、「燕の国につたへて、代々のてうほうとす」としており、代々伝わる重宝である眉間尺の剣を、「吉例なればとて、このけんをけいかにあたへ給ふ」が、その吉例とは、青短本自らが語るように「父のあたをほうせしつるきなる」からである。次に穂久邇本においては、「えんのくに、と、まつて、太子丹のたからとな」つた眉間尺の剣は、太子の運命が窮まつた故に剣を奪われたのであり、一方「しくはうていは、このつるきをえたまひてのち、いよいよ天下おさまりなひきしかは、子孫萬里につたへて、てうほうとすへしと、よろこひ給ふ事かきりなかりけり。」として物語を終結させるのである。

両本ともにこの剣を重宝と位置付けているが、穂久邇本がこの話を物語構成の上で末尾に置き、天下が治まることと、この剣を重宝として子孫に伝うべきことを結び付けた意図は、看過してはならないであろう。結果として青短本と同じく始皇帝への祝言性を帯びて物語を終える穂久邇本であるが、その物語構成の前提には、『太平記』に語られるような眉間尺の剣に対する認識が横たわつていたのである。代々継承されて権力あるいは王権の象徴ともなり、歴史観ともつながる剣の物語を、我々は『平家物語』や『太平記』のそれですでに知っている。穂久邇本の作者は、天子に伝わる剣という要素が始皇帝の物語を終結させる術と成り得る事を知つていたのである。

穂久邇本は、『咸陽宮』絵巻の他の伝本にはみられない、いまひとつの「天子の宝」について記している。六国の王と秦王との争いの中で、穂久邇本のみは会盟の故事に言及しており、これは『太平記』巻二十七「下和壁之事」にも「異国ニハ会盟とて、隣国ノ王互ニ國の境ニ出合て、羊ヲ殺テ其血ヲ啜リ、天神地祇ニ誓て、法ヲ定メ、約ヲ堅シテ、交リ結ブ事アリ」と説明されている。穂久邇本は会盟の故事のひとつの挿話を記す。

一とせしんわうとてうわうと、くわいめいせられし時、親王心かたましうして、てうわうのもち給ふ和氏か玉をとらんために、つはものをかくしをき、てうわうをおひやかして、かの玉をうはひ、立かへらんとしたまふを、てうわうの臣下に、りんしやうしよといふけんしんありしか、ちりやくをもつて、しんわうをおとして、やかて玉を取かへしぬ。

趙王の許に伝わつたという下和の玉を秦王が掠奪するが、藺相如の計略によつて玉を取り戻す。これは『太平記』にも語られていて、

此玉代々天子ノ御寶となつて、趙王ノ代ニ傳ハス。趙王はヲ重シテ、趙壁ト名ヲかへて、更ニ身ヲ放チ給ハズ。

のように、下和の玉が代々の天子の宝であつたとしている。もつとも記述の近い専修寺本に比しても、省略の多い穂久邇本であつてみれば、独自に筆を揮つた箇所には何らかの意図を読みとることもできよう。すくなくとも、唯一下和の玉と眉間尺の剣の双方について語り、後者によつて物語構成の末尾を始皇帝の祝言性に帰結させた穂久邇本作者が、その天子の宝としての性格に無意識であつたとは思われないのである。

『咸陽宮』絵巻を考える上で、咸陽宮譚という根本の素材となつた『平家物語』もさることながら、作品の枠組には、前節において穂久邇本の構成をみたように『太平記』の世界が存外大きな意味を持つたものではあるまいか。

ここに、その『太平記』と密接な関係にある『咸陽宮』絵巻の伝本がある。第二系統のスペンサー本の下巻冒頭は

か、りしところにかうう、百萬騎の兵をしたがへ、かんこくの關にうちいらんとしけるに、關の戸かたくとぢてかううをいれたてず。項羽大きにいきりて、當陽君と云將軍に二十萬騎をさしそへ、かんこくの關をうちやぶり、かんやうきうにせめいりければ、

と、秦滅亡後の漢高祖と楚項羽の争いから語り始めるが、『太平記』卷二十八「漢高祖与楚項羽合戦之事」にも『史記』項羽本紀に基づく一連の興亡が語られている。

(脱文有り—稿者) 開てかううヲいれス。かうう大^{キニ}いかつて、當陽君に廿万キノ兵ヲさしそへ、函谷ノ関ヲ打やふつて、咸陽宮へ入^ニケリ。

このような酷似した本文となっている箇所も多く、一方で兵の数に異同を来す部分もあって、『太平記』の伝本のいづれかに直接拠つていと断定するのは困難なものの、漢高祖が項羽の許から張良の機転によって逃走する際の供の四人を、『史記』が「樊噲、夏侯嬰、靳強、紀信」とするのに対して、『太平記』が「靳強、紀信、樊噲、

夏侯嬰」の順で、スペンサー本は後者に一致する点、さらに、沛公から白壁を献上されたことを喜び、沛公を逃がした事の重大さに気付かない項羽を范増が詰る部分に、『太平記』は「かう王猶も范増か心ヲ覺^ラス、いたく酔て、帳中へ入^ニ給へは」という『史記』にはない脚色を施すが、これがスペンサー本には存する点など、『史記』そのものからスペンサー本が訳出したものでないこともまた明らかである。

前節において、穂久邇本の始皇帝前史の卞和の玉について語る部分にふれたが、『太平記』卷二十七がそれを語る部分の直後の章段には、引事として咸陽宮の威容や徐福と不老不死の逸話を含む「秦始皇求蓬萊事」が綴られている。続く卷二十八には、秦の滅亡から項羽の敗北を語るが、「かう王ツキニ亡^ビて、漢七百ノ祚ヲたもちし事ハ、夕、陳平、張良か謀ニ、詐て和睦せし故也。其智謀今又あたれり」とするように、足利直義が降参の旨を書き送ってきたことに對する僉議に決着を付けるべく北畠親房が引いた長大な物語であり、『太平記』が張良の智謀を主題としてこの挿話を記すことと、スペンサー本が、張良によって物語を終えようとした姿勢とは無関係ではあるまい。

『太平記』において、ここに引く卷二十七および続く卷二十八の引事の間には、中国故事をまったく引いていない事も注意されなければならぬであろう。スペンサー本がひとつの物語として語らうとする「中国史」の枠組は、すでに『太平記』において整えられていたそれを学んだものといことがいえよう。また第一系統諸本は秦史あるいは始皇帝史の体裁を採るが、それとて『太平記』卷二十七の引事の枠組から逸脱して成り立っているものではない。穂久邇

本、青短本が引く眉間尺譚あるいは徳久邇本のみにみられた卞和の玉の流伝も『太平記』に記されている事を思うと、『咸陽宮』絵巻が物語として成り立つ上で『太平記』の世界が果たした役割は多大であったと言わねばならないであろう。

『太平記』の影響という点では、中世、近世の多くの文芸にそれが確認されており、たとえばお伽草子『倭藤太物語』などは、『源平盛衰記』と『太平記』に多くを依拠して²⁰いて、『咸陽宮』絵巻の方法とも繋がるものである。そうした他の文芸の成り立ちの中に『咸陽宮』絵巻の物語化の方法も相対化して論じられる必要があるが、その上で猶、『平家物語』咸陽宮譚を核としながらも、『太平記』自身の持つ『中国史』の枠組をもつて物語を構成しようとした享受の在り方は、やはり独自性を保ち得るものではなからうか。『平家物語』と『太平記』に引かれる中国故事の多寡あるいは重みの差は歴然としており、この両書の違いは、『咸陽宮』の依拠資料としての性格の違いに繋がっている。

七

『咸陽宮』絵巻第一系統の諸本および第二系統のスペンサー本について、個々の伝本の物語化の方法としてその特質を論じてきたが、多様な伝本が伝わる『咸陽宮』絵巻であるだけに、それをひとつの物語として構成しようとした意図も画一的ではない。本文の先後関係や成立時期には極力ふれない姿勢で、まずは各伝本の独立したひとつの物語としての性格を本文そのものの叙述から読み取れることを眼目とした。かくも多様な伝本が残された背景には、先後関係に単

純に還元されない、この物語が内包していた変容へのエネルギーが横たわっているように思われる。『平家物語』という源流を同じくする謡曲を再び利用して本文に取り込む伝本の存在も、その一面を端的に表しているようにし、素材となった『平家物語』の咸陽宮譚そのものが、異本間で内容を異にすることからもそれは窺われる。このように『平家物語』咸陽宮譚が後世の文芸に与えた影響は甚大であったが、『咸陽宮』絵巻の独立した物語としての成立は、『太平記』の成立を待たねば成され得なかったものである。

注

- (1) 『燕丹子』あるいは『燕太子』とも称されたようで、諸書「三卷」とするものが多い。
- (2) 『咸陽宮寛書—朗詠注との関連—』(『中世説話の文学史的環境』所収 和泉書院 一九八七・一〇)
- (3) 黒田彰氏「朗詠古注」管見—永清注について—(『前掲注』(2) 引用書所収) 参照。
- (4) 山崎誠氏「和漢朗詠抄」後考」(『中古文学』39 一九八七・五) 参照。
- (5) 『芸文類聚』の引用は、上海古籍出版社版による。
- (6) 『太平記』の引用は神田本により、私に句読点を施した。
- (7) 伊井春樹氏「咸陽宮絵巻」の諸本とその性格」(『国語と国文学』一九九二・四) に指摘がある。
- (8) 前掲注(7) 参照。
- (9) 『源平盛衰記』の引用は、慶長古活字版による。
- (10) 引用に際しては、私に句読点を施した。以下に引用する『咸陽宮』諸本も同じである。
- (11) 前掲注(7) 参照。
- (12) この記述は『源平盛衰記』ではなく、現在知られる『源平盛衰記』そのものからの引用だけでは説明できない箇所もいくつか見られる。
- (13) 『源平盛衰記』はこの后を「玉梓殿ノ楊仁后」として、青短本とのみ一致するので、この二書は一応別系統であると考えられる。専修寺本には「水魚も

おとりいつ」という喩えがあるが、これは「列子」湯問の「瓠巴鼓琴、而游舞魚躍」や、同じく楚人瓠巴の琴の上手なることを喩えて、『統教訓抄』が「琴ヲヒキシニハ、ソラトブトリモ下リ、鰐魚モ出テキ、シナリ」とするのに類例がみられる。

(14) 謡曲の引用は、『謡曲二百五十番集』（赤尾照文堂 一九七八・七）による。

(15) 概して第一系統本の中では、専修寺本と穂久邇本との間に近似性がみられ、また両本に共通する部分においては、穂久邇本に省略のみられる場合が多い。謡曲の引用部分に関してもこれと同じ状況がみてとれる。

(16) 「眉間尺外伝―孝子伝との関連―」（前掲注（2）引用書所収）参照。

(17) 前掲注（16）の論考に詳述されている。

(18) 「太平記」（神田本）巻二十八「漢高祖与楚項羽合戦之事」には、項羽の臣下范増の許に「莫耶の太刀」があったとする所伝すら存する。

(19) 前掲注（15）参照。

(20) 大島由紀夫氏「お伽草子『俵藤太物語』の本文成立」（『伝承文学研究』31一九八五・五）に詳しい。

— 本学大学院博士後期課程在学 —